

をしのぶ [第17回]

オールドタイマーが遺した一冊のアルバム

by Editor Shinzaburo Kawai, JA1FUUY

いつのころか「モービルハム」編集部へ送られてきた小包の存在をしばらくの間、思い出すこともなく忘れていましたが、書庫の整理に取り掛かっているときに当時のままの小包を発見しました。

差出人は植田常夫さん、コールサインは JA5NG、香川県大川郡白鳥町とあり、包みを開くと一通の手紙と黒い表紙のアルバムが出てきました。

このアルバムは 植田さんの親類の ex J4EA、岡本良雄（香川県引田町）さんが遺された一冊で、昭和 8 年（1933 年）J4EA を開局のシャックが冒頭に飾られており、当時交流していたオールドタイマーの活躍がモノクロ写真に鮮やかに焼き付けられていました。



アルバムには昭和になって再び開局し活躍された有名な OM たちの写真を見ることができて興味深いものがあります。

すでに故人になられた方も少なくありませんが、そうした方々を織り交ぜてアマチュア無線の草創期に活躍されたオールドタイマーの様子を遺された写真から追ってみたいと思います。

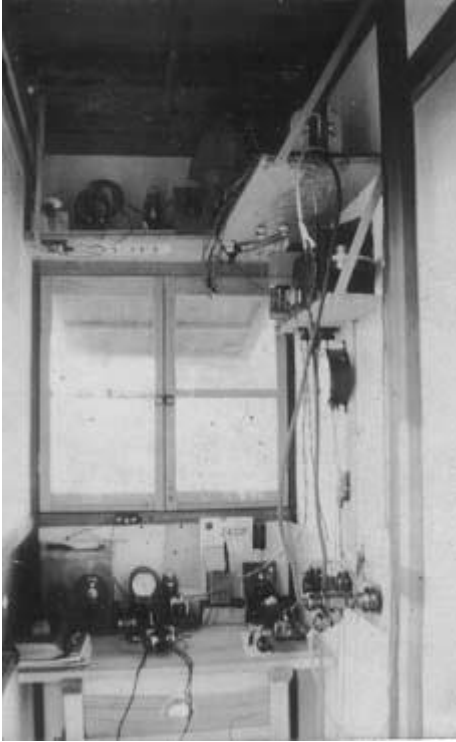
▼植田さんの手紙から抜粋

私の親類が大昔、昭和 10 年頃、J4CW、J4EA で出ていました。その頃の各局の写真を 108 枚いただいているのですが、私には見飽きて必要ありませんので、もし皆さんに見ていただけるようでしたら寄贈いたします。de JA5NG

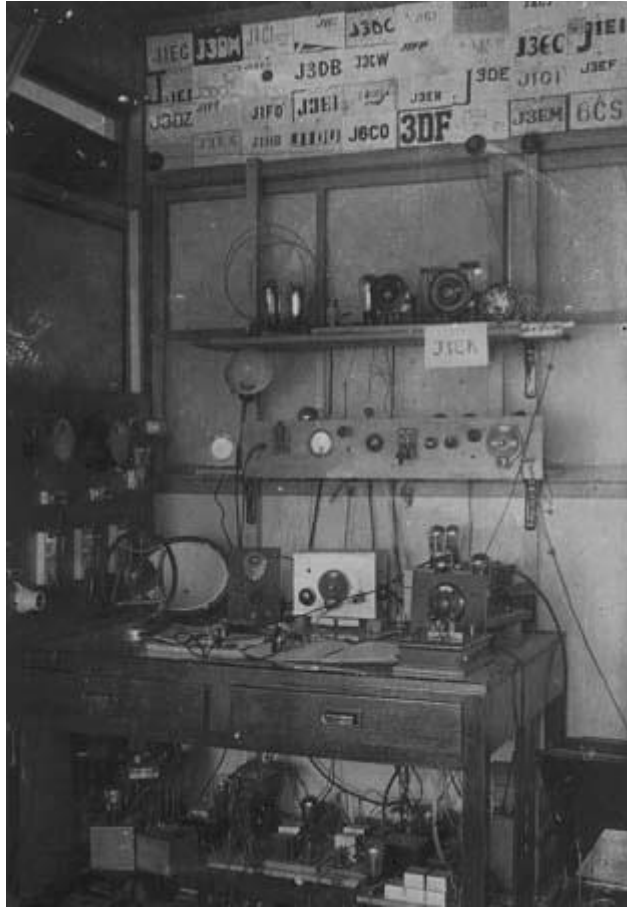
写真のコールは J4EA、J4CB、J3DZ、J3CW、J3EK、J3EH、J2KJ、J7CG、J1EG、J2HJ、J2CD、J2HE、J1EA、J6CO、J4CT、J4CF、J3EF、J3DO、J3DT、W6GPB、DE1178、J4CL、J3CX、J4CM、J4EM、J3DP、J3EM、J1DO、J2GX、J6CO、J6CP、J2GW、J2KQ、J2HD、WA6GAL、J3DE、J3FK、W6FZY、K6CGK、J2KJ、J1FF、J2HZ、J4CI、J2CC、J4CJ、J3FI、J2KP、MX2B、鳥取工業学校施設、MX2A、J4CO、J4CP、J2IX、J2LW、K6CQV、XU5KT、K6AKP、EA3DY、K6CRU、K4CQV、J5CM、VK3ERS、J4CG。

*色つきコールサインはご紹介済み

▼J4CP と J3EK のシャック



J4CP 中津江 功さん



J3EK 岸本長彦一さん (兵庫県小田村)

昭和 15 年 (1942 年) はどんな時代か？

空白期

- 時差のミス

その夜、林田中尉は初通信の通信兵に畑中軍曹らを指名した。

「いいか、絶対に気どらないように打てよ」

「まあ、見ていてください。自信はあります」翌日、本部で苦心して書き上げた通信文の文案が深堀隊長に届けられた。

《通信点付近で日本軍は道路を建設中。通信点はマナット近くに移転完了。缶詰を開けていて右指負傷、通信ままならず》

読み終わった隊長は、ペンを取って追加した。

《作戦道路はダラバイ付近まで完成》

少しくらは本当のことを入れておこうという苦肉の策であった。航空写真と照合すれば、この通信の真偽は人目で分かるのだ。



香山 晃著 電波実験社（昭和 51 年初版）*

18 年 10 月 8 日の午後 9 時、畑中軍曹と、同じハム出身の上田軍曹の手によって初通信が打電された。ところが世紀の通信で、とんでもない失敗をやらせてしまった。通信終了時刻を、日本軍の使っていた日本標準時（JST）の「9 時」と打ってしまったのだ。メルボルンは時差があり、「10 時」と打たなければ正確ではない。日本軍が全占領地で JST を使っていたために生じたミスである。あとでこれに気づいた林田中尉は、青くなって深堀隊長に報告した。

「すべて私の責任、どんな処分でも受けます」

「やってしまったことは仕方がない。それに 1 時間ぐらいの違いなら、スパイの腕時計が狂っていたという解釈もあるだろう。くよくよするな」

と返ってカづけた。

謀略通信は成功した。メルボルンから日本軍の兵力、主力部隊名、飛行場の設置状況などを暗号で聞いてきた。そのたびに林田中尉は、でたらめの返電を打たせた。この通信の効果が立証されたのは 12 月 24 日、クリスマスイブのメルボルン放送であった。

《われわれはチモール島に日本軍の精鋭 4 万人が待機していることを知っている。ことしはチモール進攻を敬遠するが、爆撃は今まで以上に行うので覚悟されたい》

島内の日本軍は実数 2 万人、それを倍の 4 万人と錯覚した放送を聞いたとき、畑中軍曹らは手をたたいて笑った。

「ひとつ食糧を取り寄せてみては・・・」突飛な思いつきがわいたのは、18 年も押しつまってのことだった。謀略通信の反響を調べるのもってこいの名案だし、それに潜入スパイも食糧不足に悩んでいると思っているに違いない。こう想像されたからである。すぐさま文案が練られた。



《原住民の協力を得られず、ジャングル生活を強いられ食糧入手不能。隊員に栄養失調者があり、至急食糧を空中投下されたし》この通信を打電すると。間もなく反応があらわれた。

《希望食糧と投下地点知らせ》すばやい反応に、日本軍が面食らった。

大急ぎで食糧リストをつくり、投下点を指定した。折り返し

《B29、2機で投下する》

と返電してきた。

当日、現地人に変装した日本軍が待機する中、轟音を響かせて B29 が飛来した。場所はマナット近くの川の合流点。B29 は翼灯で Q 符号を発した。合言葉である。地上から懐中電灯で K 符号が返された。B29 は高度を下げ、大きくせん回しながら食糧を投下していった。

拾い集めてみると、20個もあった。落下傘を外しトラック1台分におさまった。クーバンの師団司令部で開けたところ、携帯口糧6か月分がはいっていた。食糧は戦利品として各隊に配分された。落下傘も回収され、開襟シャツに縫い直されて支給された。畑中軍曹らはこれを「豪州給与」と呼んだ。

豪州給与は日本軍の二セ電波で数度投下された。「こいつにありつける間は、謀略通信は健在だ」こういって林田中尉はほくそ笑んだ。19年になって間もなく、メルボルンから面倒なことを要求してきた。

《さらに一組のスパイを上陸させる。時期と場所を知らせよ。スパイは落下傘で降下させる》

スパイ2号の潜入電を受け取った司令部はただちに逮捕の準備にはいった。林田中尉は

《落下傘は危険である、われわれと同じく潜水艇で送り込むのが妥当》

と返電させた。数回のやりとりの末、スパイ2号は、1月29日午後11時、ダラバイ海岸に上陸することになった。当日夜、憲兵隊が武装してダラバイ海岸に待機、上陸を今や遅しと待ちかまえた。

スパイ2号も逮捕

林田中尉のひきいる迎撃隊はデルタ地帯の草むらにひそんだ。「スパイ全員を生け捕りにせよ」との至上命令があったからだ。丸腰で武器は持たず、現地人に変装していた。

「来たぞ」

低い隊長の声、ふと海面を見ると、一隻のボートがうすもやの中から、こちらに近づいてくるのが目にはいった。スパイ2号は白人2人、現地人3人。砂浜に着くと、口笛を吹きながら荷物の積み下ろし作業を始めた。別に警戒する風でもなかった。「スパイ1号」の電波を信頼しきっているようだった。林田中尉の合図で現地人がロバを連れて迎えに出ると、白人の大男がたずねてきた。

「ピリス中尉はどうした」

「山の上で待っている」

大男は疑いをはさまず、手はずどおり予備の無線機と電源、暗号書を土中に埋め、山頂へ向かって出

発した。道の途中で、待ち伏せしていた兵がバラバラと組みついた。2人の大男は激しく抵抗したが多勢に無勢、到底迎撃隊の敵ではなかった。取調べに対し2人はジャクソン大尉、リップマン軍曹と名乗った。レインジャー部隊で知られるケインズ学校出身である。深堀隊長は畑中軍曹に命じて二セ電報を打った。

《ジャクソン大尉ら着任、新任務につく》

折り返しメルボルンからまたやっかいな提案が返電されてきた。

《ピリス中尉の報告を聞きたい。ジャクソンが着任したので、ピリスは帰れ、脱出計画を知らせよ》

深堀隊長は頭をかかえこんだ。ピリス中尉を帰すことは絶対にできない。適当な理由をつくってことわらねばならない。無理がなく敵に怪しまれないような理由は見当たらなかった。あべこべにアーストラリア軍の方は筋道が通っていた。新旧暗号書の交換が、スパイ2号の主要任務である以上、任務達成でスパイ1号を呼びもどして休養させるのは当然の措置である。

「一犬虚をほえて・・・か、こいつはとんでもない難題だな」

「隊長、海岸線の警戒が厳重になったことにしては・・・」

「駄目だよ、それじゃジャクソンはどうして上陸できたかと疑問がわくじゃないか」

名案が浮かばないまま日時はどんどん過ぎていった。

「スパイがマラリヤにかかったことにして、医薬品を受け取ろう」

一石二鳥の案が採用され、帰還命令の引き延ばし策として打電された。数日後、ボーイング B25 が飛来し、医薬品10人分とメリケン粉などを投下していった。

一寸延ばしの回答には限度があった。ある日、深堀隊長は林田中尉、富田軍医らを呼んでおごそかに宣言した。「メルボルンの命令を拒否するためには、スパイを殺す以外に方法がない」

「というと消すわけですか」

富田軍医が驚いて右手で注射するまねをした。手がわなわなふるえていた。

「うん、メルボルンは電波望遠鏡でチモールの部隊を見ているようなものだ。消し方さえ誤らなければ問題ないぞ」

居合わせた人たちは首をすくめた。深堀隊長のいう意味が飲みこめ、ほっとしたようだった。「富田軍医は筋書きをつくれ、首切り役は無電隊だ。気づかれないよううまくやれ」いいおわると隊長は日本刀をつえに立ち上がった。

だが二セ電波でスパイ1号を消す必要はなかった。ピリス中尉は風土病にかかり、みるみる弱っていった。富田軍医はいったん野戦病院におさめた医薬品を取りもどして、つきっきりで治療したが、その甲斐も空しく病死した。通夜の日、二セ電波ははじめて真実をメルボルンに伝えた。

《ピリス中尉病死》

返電は丁重なものだった。

《戦病死をいたむ。勲功により大尉に任ず、メルボルン本部》

6 寛刑判決

スパイ電波は敗戦の8月15日まで休みなく続けられた。毎月1回平均で豪州給与を受け取った。敵機はB29がほとんどだったが、たまにブリストルなどの雷撃機の時もあった。投下品も食糧のほか、かみたばこ、ウイスキーなどの嗜好品から、時計、無線機、雑誌に及んだ。ペニシリンという抗生物質や積層乾電池はまだ日本に製品がなく、そのまま日本へ送られた。無電隊には外国語に堪能なものが選抜されて配属された。

欧文通信の上田軍曹、カリフォルニア農大出の神元兵長、大阪外語大出身の井上上等兵がメンバーとなった。敗色が濃くなった20年8月、メルボルンはポツダム宣言を伝え、降伏を勧告してきた。8月15日、スパイ電波は次のメッセージを送って、長かった謀略通信にピリオドを打った。

《日本軍の追及急、通信続行不可能。しばらく送信を中止する》

戦後、オーストラリア軍はこのスパイ通信を調査した結果、「コマンドの準作戦行動であった」として不問に付した。企画立案者は罰せられず、畑中軍曹らスパイ電波に作戦にたずさわったものだけが、ポートダーウィンで軍事裁判を受けた。被告13人のうち禁固1年、3ヶ月、1ヶ月がそれぞれ1人、残り10人は無罪になった。

（「ハム半世紀」香山晃著 p.100~106 電波実験社刊より抜粋） 絶版

■「ハム半世紀」著者略歴

香山 晃 本名：梶本 昶良（かじもと・ちから） 昭和2年大分県に生まれる 31年読売新聞大阪本社に入社 大分支局、報道部を経て西部本社連絡部勤務 32年JA6UU 開局 元JARL通信運用委員

JARL NEWS 1940年2月号 第87号より

今年への希望



新しい年を迎えて盟員諸兄にはそれぞれ今年のプラン、今年の希望をお持ちのことと思う、この盟員の集合体であるJARLもまた当然プラント希望を持たなくてはならない。

私はこのときに際して一つのプラントそれによって来るであろう希望について申し述べたい。

今まで我々ラジオアマチュアは各々の好むところにしたがってそれぞれに「よろこびをもって」そこに精通し続けてきた。そしてその一つ一つは取り立てて言うべきあるいはあまり小さなものかもしれないけれども、その集合体JARLは一つの

力をいつの間にか備えるに至った。こうして JARL は運行されてきた。これは正しい運行であると私は確信している。

しかしながら今我が国の直面しているこの時局、全国民があらん限りの力を合わせて努力すべきこのときにおいて我々は今一步、今までの運行を押し進むべきではあるまいかと思う。即ち各々の好むところにしたがって精進するという考え方に進むべきであるまいかと思う。さらに言い換えれば個人のアマチュアラジオではなく、団体のアマチュアラジオへの進発を考えるべきでないかと思う。

我々JARLの仕事に携わる者は、今こうした考え方で今年のプランを練りつつある。そしてこれによって来るべき希望を明らかにしている。これらの具体的事実は順次本誌を通じて諸兄に見えるであろう。諸兄の切なるご協力をお願いする次第である。諸兄のご協力こそはプランを基部の実現に運ぶ唯一の実力なのだから。

JARL 本年への希望をぜひとも実現したい。そしてそれによって個人の今年への希望もさらに強化されるであろうことを確信する。(15-1-6) **J2GR 笠原 功一**

(編注：現代仮名遣いに変更しました。写真は JARL 資料室収蔵)

▼J2CG 林太郎 ミュージアム

1931-1979 に活躍された J2CG 故林太郎さんの遺品の一部を YAHOO オークションで落札された岩岡氏 (JG1AKM)のご好意により「QRA BOOK」「QSLカード」「戦前のJARL NEWS」など貴重な資料を QTC-Japan.com に寄贈いただきましたので、その中から珍しいカードを順次ご紹介して参ります。



W6ADK 1932年



W9FJR 1936年4月11日

[参考文献]

「アマチュア無線のあゆみ（日本アマチュア無線連盟 50 年史）」 日本アマチュア無線連盟 50 年史
編集委員会編

「日本アマチュア無線外史」 JA1CA 岡本次雄、JA1AR 木賀忠雄 共著 電波実験社

「ハム半世紀」 香山晃著 電波実験社

「JARLNEWS 1937 年 10 月号」第 66 号 J2CG 林太郎氏の遺品から（JG1AKM 岩岡氏提供）

編注：故人を付すること並びにコールサインに EX をつけることを省略しています。

de JA1FUY

QTC-JAPAN.COM 2007.11.11